

チェコにおける女性研究者のライフコース

— 保守的女性性とキャリアとの葛藤を中心に —

石倉 瑞恵*

要 旨

二世女性研究者の経験から、世代を超えて内在化された保守的女性性、および女性研究者のライフコースの変容を明らかにした。社会主義的女性研究者は、育児と研究の両立に困難を抱え、育児に対する社会的評価が低いため育児期には偏見的処遇も経験したが、これらの困難を女性には当然のこととみなし、男性の優位性を容認する傾向にあった。民主化後の女性研究者にも同様の困難や認識はあるが、社会主義期的女性研究者と異なり、民主化後の大学キャリア・ステージの中では、育児による中断が研究への復帰を困難にすると危惧する傾向にある。また、このキャリア・ステージには、女性研究者が葛藤を抱える二つの通過地点がある。長期在外研究・ジュニア助成獲得期、そして、経営的視点のある研究者として確立する時期である。育児に責任を感じる女性研究者は消極的であること、経営という資質が保守的女性性と反し、そのような女性研究者モデルが不在であることが要因の一つである。

キーワード：ジェンダー／女性研究者／ライフコース／社会主義／民主化

はじめに

これまでの研究では、チェコには女性の職業上の成功は家庭・育児と両立している状態を示すとする認識がある一方で、研究職に就く女性にとって出産・育児がキャリア継続の障壁になるというアンビバレントな状況があることを示した。その結果、大学等研究職では、職階が上昇するにつれて女性研究者がフェイドアウトする現象が見られる（注1）。

社会主義期には女性労働の解放が進み、社会的保育等の家族支援が充実していたのであるが、1989年の民主化後、社会主義特有の公的支援が解消した後には、新たな女性支援策が生み出されなかった。それは、社会主義期的女性解放が単に女性労働の推進のみを目指し、家事育児に価値を付与する認識の変容を目指していなかったからである（石倉, 2017, 66）。女性の使命を家庭に見出す保守的認識、家事労働や育児を社会的労働よりも低価値のものともみならず認識を覆す機会がないままに、働く女性も自らそれを問題として掲げることにはなかった。

女性研究者の意識の中にも鮮明な保守的女性性があり（石倉, 2018, 47）、育児と研究活動の両立における葛藤を強く感じつつも、その葛藤は女性

には不可避なものであるとして、解消に向けて積極的に働きかけることはなかった。

本研究では、民主化以降、大学のあり方が大きく変容し、そのことが育児期的女性研究者の葛藤をより深刻にする原因となっていることを明らかにしている。とりわけ、保守的女性性や民主化後の大学変容が女性研究者にどのような葛藤と将来への展望をもたらしているのかについて、女性研究者の声と経験から把握しようとする。

1. 分析対象

チェコにおいて、ジェンダー研究は民主化以降ようやく着手された分野であり、その関心度は西欧諸国に比して著しく低い。大学と女性をテーマとした研究は、2001年に設立されたチェコ国立コンタクト・センター（Národní kontaktní centrum –gender a věda、以降コンタクト・センター）が担ってきた。その研究は、主として表舞台に立つことができなかった女性研究者の名前と業績、ライフコースを文字化すること、そのデータを活用し、女性研究者の意識普及活動と支援活動、大学に対するロビー活動に従事すること、すなわち実践的研究活動が主であった（石倉, 2018, 50）。本研究の意義は、コンタクト・センターがこれまでに蓄積した声のデータを歴史的・社会的

* 石川県立大学 生物資源環境学部 教養教育センター

背景と照合して女性研究者をとりまく問題の変容に着目し、その要因を明らかにすることにある。また、日本人女性研究者による分析の意義は、チェコ社会構造の外部から、日本との比較を通して初めて可視化する事象を明らかにすることができる点にある。

本研究において分析対象とする資料は、コンタクト・センターが2001年から2014年までに行ったインタビューの記録である。それは3点の資料からなる。一つ目は、2001年から2004年にかけて同センターが実施したプロジェクト「今月の女性」の記録である。「今月の女性」では、毎月一人の女性に焦点をあてその半生についてインタビューを行った。そこに含まれる女性研究者は、民主化直後に40代から50代であった(注2)。

二つ目は、2005年のプロジェクト「才能ある女性」の記録である。民主化後に大学に入学し、博士課程に在学中、あるいは修了した20代後半から30代の若手研究者を対象としたインタビューであり、特に将来の展望に焦点化している(注3)。

三つ目は、「才能ある女性」プロジェクトの7年後の追跡調査である。30代から40代になった若手女性研究者がどのような選択をしたのかが明らかになる(注4)。

二世代の比較を通して、社会主義期思想がもたらした弊害、一方で政治と時代の影響を受けずにチェコ社会の根底を流れるジェンダー認識を明らかにすることができる。さらに、二世代女性研究

者のライフコースの相違とその背景、とくに、大学民主化が女性研究者のキャリア形成に及ぼした影響を明らかにすることができる。

2. 社会主義期の女性研究者のライフコース

「今月の女性」でとり上げられた女性研究者のうち、8人の半生を研究者への道のり、社会主義期の育児・差別的処遇という観点から検証する。プロフィールは表1に示す通りである。以降、資料からの抜粋箇所の文末、および本文中に示した丸数字は、表1、2に付したインタビューの通し番号を表している。

(1) 研究職への道のり

彼女たちは社会主義政策の影響を直に受けた世代であり、それはたとえば表1(a)の「取得学位」にも表れている。「CSc」、すなわち「科学候補生(Candidate of science)」は、社会主義期の学位制度で(注5)、「博士」に代わる資格として設けられた。「博士」はブルジョワ制度の残滓として廃止されていたので、民主化後に博士を取得した者(表1(b)⑧)もいる。

社会主義期のキャリア(表1(a))を見てみると、科学研究職に就いていた者は①および医学の②③であり、他は研究員・調査員(⑤⑥⑧)やプログラマー(④)等科学研究に相当しない職である。また、民主化後(表1(b))数年のうちに8人全員が新たに大学や科学アカデミー(注6)の正規研究者として就任していることがわかる。社会主

表1 社会主義期の女性研究者のプロフィール

	専門	(a) 社会主義期の取得学位とキャリア	(b) 民主化(1989年)後の取得学位とキャリア
①	社会学	修士(1969)。博士(1983)。科学アカデミー社会分析研究所企業調査員(1970-)。労働社会問題研究所調査員(1977-)。社会学研究所研究職(1983-)	科学アカデミー社会学研究所長(2001年-当時)
②	医学	修士(1970)。CSc(1976)。カレル大学医学部医局員	DrSc(1990)。カレル大学医学部准教授(1994)、教授(2000-当時)。科学アカデミー実験科学研究所神経科学部局局長(2001-当時)
③	医学	修士(1963)。カレル大学医学部医局員	カレル大学医学部教授(1997-当時)
④	数学	修士(1972)。プログラマー	科学アカデミー研究職(1990)。科学アカデミー情報学研究所理論情報学部局局長(2000-当時)
⑤	生化学	修士(1971)。マサリック大学自然科学部生化学研究員(1983-)	CSc(1993)。マサリック大学准教授(1997)。科学アカデミー分析化学研究所所長(2005-当時)
⑥	農学	修士(1975)。作物栽培学研究生(1967-1968)。農産物商社事務員(1969-)。ブラハ農業栄養経済学研究所所員(1974-1992)	ブラハ農業大学人間農村社会学教授(1993-?)。チェコ農業大学経済学部人文・社会学研究学科学科長。(一当時)
⑦	体育学	修士(1979)。不明	カレル大学体育スポーツ学部教育学・心理学・教育方法学科准教授
⑧	生物学	修士(1964)。CSc(1969)科学アカデミー微生物学研究所研究員	博士(1993)。科学アカデミー微生物学研究所所長(一現在)。アメリカ、ソルトレイク・ウタ大学教授(2000-当時)

出典：Tupá, 2005.より作成。注：⑥以外は全員が育児経験者。(b)②の「DrSc」は、医学学位。

義期の不遇は、政治的理由によるところが大きい。⑥のインタビューイは、思想上問題のある家庭、すなわちブルジョアの出自であるとみなされ自由な職業選択ができなかったと述べている。

「1958年に初等教育を修了するが、政治的理由により進学推薦書を得ることができなかったため、工場で働かなければならなかった。そのうち農業職業学校に通う機会を得て、そこから農業技術中等学校の経済学科へと編入した。⑥」(Tupá, 2005, 70)

彼女はその後哲学部に出願したかったものの、自ら進路選択をする機会が与えられなかったので、農業カレッジを経て農場の研修生となり、庭師、農産物会社、農業研究所等、会社勤めを転々と経験した。「屋内での研究」に従事したいという思いが強く、カレル大学哲学部の通信制で学んだ。民主化後の1993年、新設された人間農村社会学の教員になった(Tupá, 2005, 71-72)。

研究職に就くことが困難であったもう一つの理由は性差別である。たとえば、①のインタビューイは「1973年、経済大学に応募し採用通知が来るも、採用されなかった」としている(Tupá, 2005, 11)。採用者側に男性を採用したいとする意図があり、内々に不採用が伝えられたと言う。しかし、当時は政治的な問題のほうが切実で「1989年以前は女性の問題は顕在化していなかった／1989年以降、様々な重要なポジションが男性に与えられた。②」(Tupá, 2005, 23)とする意見もある。政治的差別が性差別を不可視化するほどの影響力をもっていたと考えられる。

この世代の女性研究者の多くが民主化後に正規研究者となった背景には、資本主義社会への移行に伴う大学の構造改革がある。民主化後の各大学では資本主義社会に対応する学部・学科が新設された。新設のピークは1991年から1995年であり、その間の学部新設はチェコ全土で38学部を超える(石倉, 2004, 56)。多くの女性研究者が採用されたのは、新設学部・学科の人材不足を補うためとも考えられる(注7)。

(2) 女性研究者と育児

社会主義期には保育施設の完全普及が謳われ、ほとんどすべての女性労働者が社会的保育を利用するようになった。しかし、論文執筆等勤務時間という概念を超えた仕事がある研究者は、社会的保育のみで両立させることはできなかった。ベ

ビーシッターを雇ったり、送迎のための車を購入したり、自らの研究時間を捻出したりと、保育時間外の育児には、金銭的負担や精神・体力的負担を伴った。

「仕事に就いてから1年で1人目を出産、7年後に2人目を出産した。最初の子どもが生まれた時から給与はすべて子どものベビーシッター代になった。保育所の送り迎えなど育児によるストレスを抱えていたらクリエイティブな仕事はできなかつただろう。②」(Tupá, 2005, 25)

研究時間の確保と育児の間で葛藤を抱えていた点は、日本の女性研究者をとり巻く現状と似通っており、必ずしも社会主義期が女性の働きやすい時代であったとは言えない。さらに、女性が不利を被るのは家族の世話においてのみという見解があるものの、夫婦で育児を分担するという提案はなく、女性が経験する必然的困難としてとらえる傾向にあった。また、社会主義期の女性の社会的労働は必要条件であったため、育児のために仕事を離職した者はいない。

なお、彼女たちの育児観は非常に保守的である。以下の記述に見られるように、家族・育児志向性が高く、子どもと家族の世話をする責任を重く受け止めている。

「仕事だけで満足する女性は少ない。家族を支え、家族との心の触れ合いの暖かさ、子どもの笑い声を求める。③」。(Tupá, 2005, 36)
「私は管理職になりたい、成功したいと思ったことはなかった。研究をして私の心の支えである息子を幸せにしたいと思っていた。④」(Tupá, 2005, 50)
「私には自分のキャリアより家族の方が重要。⑦」(Tupá, 2005, 83)

(3) 育児世代へのハラスメント

社会的保育の完全普及は、女性が社会的労働へ従事するための入口の確保にすぎない。家事労働の軽減措置、職場における母性保護の措置等、福祉的配慮は十分ではなかった。社会主義が家事・育児の価値を過少評価していたからであり、この過小評価は、育児を担う女性労働者をハンディキャップの伴う労働者とみなす偏見として表象される。

なお、職場(科学研究以外の職場も含む)で育児期のハラスメントがあったと語るインタビュー

イはいるが、学生時代にハラスメントを意識する機会はなかったという意見が多く（注8）、女性に対する偏見・ハラスメントは育児世代に対するものであると見なすことができる。

「1977年からの職場（労働社会問題研究所）では、子どものいる女性は仕事量が少ない（実際はそうではないが）との偏見があった。自分はすでに2人の子もちだったので、職場では、家族のことを話したり、仕事の愚痴をこぼしたりしないように注意を払っていた。3人目の子どもを妊娠した時は、6か月までそれを隠していた。職場の上司は、職場の混乱をなくすために、2人目の子どもができれば避妊治療をすべきだと言っていた。①」（Tupá, 2005, 14-15）

さらに、上述のような育児期の女性に対する偏見に基づき、給与等待遇における差別化があったことも指摘されている。

「学生の時は、女性であろうと異なった扱いは受けないが、仕事に就くとそうではない。1989年以前には、男性の同僚のみの給与ベース・アップがあった。私の場合は、育児休暇

から戻った時、待遇が悪くなった。出勤時間、保育所への送り迎えを配慮した勤務時間の変更を願い出たが、上司は許してくれなかった。職場復帰後の仕事も自分の望みどおりの内容ではないため仕事をやめた。チームのリーダーに応募しても、同じ能力であれば、男性の上司は男性を選んだ。⑤」（Tupá, 2005, 62）

女性であることを理由に差別を受けたことはないと述べているインタビュー⑥も「女性は、子どもがいる、いないに関わらず男性の優位性の下に位置している。／男性にはネットワークがあり、そこに女性が入りこむ余地はない」（Tupá, 2005, 76）として、漠然とした男性優位の環境、女性をとり込むことができない暗黙の男性ソサイエティが存在していたと指摘している。しかし、彼女たちは、「男性の役割は意思決定で、女性の役割は実働という考え方⑦」（Tupá, 2005, 80）を根拠として、差別や偏見、男女間の上下関係を甘んじて受け入れる傾向にある。

総じて、社会主義期の女性研究者には、育児による葛藤と困難は女性が当然乗り越える課題であり、男性の優位性は避けがたいとする保守的認識がある。

表2 民主化後の女性研究者のプロフィール

	専門 (生年)	(a) 2007年時点の取得学位、キャリア、家族	(b) 2017年—2014年までの取得学位、 キャリア、家族の変化
⑨	財政学 (1974)	博士(2001)。経済大学公共財政学科でジュニア助成を受けながら非常勤講師。子ども2人	40歳。経済大学公共財政学科上級助手
⑩	化学 (1980)	博士(2007)。修士課程在学中から科学アカデミー有機化学・生化学研究所で働く。同研究所ポスドク	34歳。カレル大学自然科学部上級助手(2009—2010)。科学アカデミー有機化学・生化学研究所と科学技術大学で研究助手(2013年—)。子ども2人
⑪	歴史学	修士(2000)。カレル大学、バリ第4大学の博士課程在籍。科学アカデミー現代研究所で下級研究員を経て研究編集部局の部局長	
⑫	生態学 (1979)	修士(2003)。修士課程在学中から科学アカデミー水生生物学研究所で働く。南ボヘミア大学生態学・水生生物学博士課程学生	35歳。博士(2008)。科学アカデミー水生生物学研究所で働く(2007年に同じ)。子ども1人
⑬	測地学 (1980)	修士(2004)。ハンブルグの大気海洋研究センターのフェロー(博士課程学生)	34歳。博士(チェコ工科大学、2012)。ドイツのハッフエンシテュー大学で教育担当(12コマ授業、2013)
⑭	歴史学 (1981)	修士(2006)。修士課程在学中から、科学アカデミー歴史研究所下級研究員。カレル大学哲学部博士課程学生	35歳。博士(2008)。科学アカデミー歴史研究所下級研究員(2007年に同じ)。子ども1人
⑮	哲学 (1975)	修士(2001)。ロンドン大学東洋アフリカ研究の講師(チェコの上級助手に相当)	39歳。ロンドン大学東洋アフリカ研究の上級講師(チェコの准教授に相当)。子ども2人
⑯	植物学 (1975)	博士(2003)。修士課程在学中から科学アカデミー植物研究所で働く。科学アカデミー分子遺伝学研究所研究員も兼ねる(2007—)	39歳。科学アカデミー植物研究所、分子遺伝学研究所研究員(2007年に同じ)

出典：Tupá, 2007. および Vohlídalová, 2014. より作成。

3. 民主化後の女性研究者のライフコース

2007年プロジェクト「才能ある女性」が対象とした若手女性研究者について、当時の研究状況、彼女たちの描いた展望を見てみる。さらに、7年後の追跡調査におけるインタビュー「才能ある女性の7年後」からは、キャリアや家族の変化を見てみる。

(1) 若手女性研究者のキャリア

表2(a)では、2007年当時の8人のプロフィールをまとめた。博士課程に在学(⑪⑫⑬⑭)、あるいは博士課程を修了(⑨⑩⑮⑯)し、研究者としてのスタートにある20代後半から30代である。キャリアは、科学アカデミーの研究者として、パートタイムあるいはフルタイム勤務(⑩⑪⑫⑬⑭⑯)、フェローシップを受けて海外の大学で研究(⑬)、ジュニア助成研究者(⑨)、国外の大学教授(⑮)である。

i) 科学アカデミーの調査員や民間研究者

若手研究者が、チェコ最大のネットワークをもつ科学アカデミーの研究所に勤務することは稀ではない。修士課程在学中から勤める者もいる(⑩⑪⑫⑬⑭⑯)。日本と比較して若手研究者の受け皿は多いと考えられる。たとえば、インタビュー⑪は、2001年から2004年まで科学アカデミー現代史研究所で下級研究者として勤め、フェローシップを受けて海外の大学で研究を行い帰国した後、再び同研究所に勤務している。2007年には、科学アカデミーの研究編集部局の部局長である(Tupá, 2007, 50)。⑭は、修士課程在学中より科学アカデミーの歴史研究所で働き、2006年からは、同研究所の下級研究者である(Tupá, 2007, 80)。しかし、「研究者」は科学研究に従事する研究職としての待遇ではなかったり、フルタイムでなかったりと、研究職志望者群にとっては一時的な職場となることがある。

ii) フェローシップ

民主化後、チェコは欧州高等教育圏構想の中で大学システムを再構築した。研究者・学生の流動性を高めるというその構想のねらいに即し、研究者は、専門分野に関わらず短期あるいは長期間、国外の高等教育機関で研究を行うことが必須とされた。「博士課程の学生に、少なくとも一回は3年間の長期フェローシップをとり国外で研究すべきだ③」と指導しているインタビューイもいる(Tupá, 2005, 33)。

8人のインタビューイのうちフェローシップを

経験したと回答しているのは5人(⑨⑩⑪⑬⑯)である。⑬のインタビューイは、2001/2002年はハノーバー大学、2003/2004年はアルフレッド・ワグナー研究所、2005/2006年はニュールンスピック大学と3回のフェローシップを受け合計3年間の在外研究を行っている(Tupá, 2007, 72)。

しかし、在外研究が必須となると、女性研究者にとっては難しい選択を迫られることもある。社会主義世代の研究者も、民主化後フェローシップに応募しようとしたが、育児のために断念せざるを得なかったと述べている。

「1989年以降、フェローシップで国外に行くことが研究者にとって必須となり、自分も応募したいと考えたが、研究者の夫がフェローシップで国外に行く間、自分は子どもの世話をしなければならないので断念した。①」
(Tupá, 2005, 12)

育児と長期在外研究との間での葛藤は、民主化後の女性研究者にとって新たな悩みの一つとなっている。

iii) ジュニア(ポストドク)助成

チェコ助成基金が給付するジュニア助成は、35歳までに応募することができる3年間の若手研究者対象助成である。その応募資格には、博士論文を提出してから3年以内という条件がついている。チェコ助成基金のシニア助成は、准教授以降を対象としているので、ジュニア助成を獲得することは若手研究者の最大の関心事であり、次のステップを見据えることができる絶好の機会となっている。

⑨のインタビューイは、ジュニア助成研究者である。博士課程在学中にフェローシップを受けて、イタリアとアメリカで計3年間研究を行った後、2002年に経済大学公共財政学科の助手を一年任期で勤め、公共財政学の二つの課程を担当していた。この任期付助手は教育担当であることが多い(注9)。2003年からはジュニア助成を得ている。2003年に第2子を出産し、助成のおかげで半年間在宅研究を行うこともできた(Tupá, 2007, 24)。

(2) 展望とリアリティ

i) キャリアへの展望

若手女性研究者が描く短期的展望は、博士を取得すること、フェローシップを得て在外研究を行うこと、そして、チェコ助成基金のジュニア助成

研究員となり、研究者としてのステージに立つことである。

「まずは、博士課程を修了したい。それからフェローシップかジュニア助成を受けたい。今は27歳なので、30歳までには子どもを1人もちたい。⑫」(Tupá, 2007 70 - 71)

しかし、それ以降のキャリア形成と長期展望は不鮮明である。すでにジュニア助成研究員の⑨が「何年間か大学で生き残ることはできるが、一定の年齢までに准教授にならないと意味がない」(Tupá, 2007, 31) と言うように、研究者としての正規ルートに至るまで何年間か不安定な待遇で研究を続けることも十分に予見される。

一方で、家族をもつこと、家族をもつことが研究へ与える影響については確かなビジョンがある。家族への展望を4人のインタビューイを例として示す。

「自分の全人生を研究に費やすとは考えられない。子どもと一緒に過ごすような生活がしたい。／子どもをもつと5年以内に研究の継続を断念することになるだろう。子育てを終えて再び研究を始めるのは難しい。なぜなら一年遅れただけでもかなりの遅れをとる分野だから。⑩」(Tupá, 2007, 36)

「もし子どもができたなら、残念ながら私のキャリアは終わるか、非常に長いブレイクになる。母に子どもを預けたり、ベビーシッターに預けたりして仕事に復帰はできないと思う。私の人生の使命は、仕事ではなくむしろ子どもと家族だと思う。／子育てと仕事の間の納得のいく関係を保てるような解決方法を探したい。⑫」(Tupá, 2007, 68)

「私のゴールは博士をとって家族をもつこと。キャリアへの道は開かれているが家族をもつことの方が難しい。⑬」(Tupá, 2007, 78)

「女性は特定の年齢になったら家族を作るかどうかを決めなければならない。もし子どもをもったら、少なくとも1年間は自分の専門、同僚、仕事から離れなければならないが、他の仕事と違い、1年間のブランクは研究者にとっては深刻なハンディである。⑭」(Tupá, 2007, 87)

どの意見からも家族をもつことへの強い願望と責任感、社会主義世代に通じる保守的女性性を読みとることができる。同時に、育児と研究の両立は困難であることが示唆されている。社会主義期

に拡充した保育所は減少し、幼稚園が主流になったため、託児は深刻な問題である。若手研究者が育児期間に仕事の継続が困難であると考えてるのは、社会的保育の減少という問題をとらえてのことである。社会主義世代インタビューイの経験からは、民主化後、育児と研究の両立が困難になったことがわかる。

「7時から15時30分まで働き、子どもを迎えに行った。できるかぎり子どもと一緒にいられるというそれだけの理由でソコルのトレーナーをしていた(注10)。夕方には仕事に戻った。こうやって学位論文を書いた。休暇でバラトン湖に行った時は、家族は9時に起きるが、自分は5時に起き、たくさん書き仕事をした。日中、家族と泳いで日光浴(私は昼寝)をした。トランプをして全員が寝てから、また書き仕事をした。⑧」

また、若手研究者は育児による中断が研究者にとってデメリットになると指摘しているが、これとは対照的な意見が社会主義期に育児を経験した世代には見られる。自らの経験を照らし合わせ、「私は女性の博士課程学生にいつも言っている。母親の時期を楽しみ、子どもと家にいなさい。／良い基盤があれば、研究者として復帰しようとした時、問題はない④」(Tupá, 2005, 49) と、一定期間の中断そのものが研究職の継続に与える影響はないとの考えである。しかし、民主化後の大学においては、「フェローシップ — 博士の取得 — ジュニア助成研究員」と35歳までのキャリア・ステージが固定化しており、このような考え方にはあまり現実味がないと考えられる。

ii) 7年後のリアリティ

7年後の2014年までに上記の若手女性研究者がどのようなキャリアをつみあげたのかについては、表2(b)にまとめた。

新たな博士取得者は3人(⑫⑬⑭)、育児世代は1人から5人(⑨⑩⑫⑭⑮)に増加している。7年前の展望とは異なり、育児と研究を両立させている。所属が同じ者は多く、職階等に変化のある者もいる。科学アカデミー研究員であった4人のうち1人(⑩)は大学研究助手を兼任している。ジュニア助成研究員をしていた⑨は同大学の上級助手に、また国外大学講師をしていた⑮は同大学の上級講師(チェコの准教授)になっている。⑬が新たに国外の大学教員になったので、国外の大学研究者は2人である。

インタビューイはおおよそ 35 歳を超えており、ジュニア助成獲得は実現できてはいないが、博士の取得、家族の形成という観点では、7 年前の短期的展望を実現していることを見てとれる。

(3) 保守的女性性と長期展望との葛藤

若き女性研究者は、語学に卓越し、フェローシップに挑戦して国際的な研究活動を行い、博士を取得し、優れて活発な研究活動を展開している。しかし、それ以降の長期的展望は不透明である。保守的な女性性と民主化後の大学が求める人材像との間には隔たりがあることに要因があると考えられる。

1989 年以降の大学は、民主化と国際化の潮流にある。民主化に伴い公立大学（注 11）は法人化し、大学の自由競争が認められ、研究予算獲得のかなりの部分が研究者の手腕に委ねられるようになった。大学研究費は、教育・スポーツ・青年省からの補助金、修士・博士課程を提供する研究のための特別研究支援金、助成金から賄われる。その中で、研究者が獲得する助成金の占める割合は高い（注 12）。大学研究者は、継続的に助成金に応募し、研究室の博士課程の学生、他の部局の共同研究者との研究に必要な資金、国際研究協力を維持するための資金を獲得しなければならない。

すなわち、大学研究者には、研究チームを形成し、研究資金を獲得する組織運営力が必要である。しかし、多くのインタビューイが示唆しているように「(男性の背後にいる) 女性はマネジメントを習得せず、ラボのリーダー、イベントの組織・運営、学生の積極的受け入れから遠ざかる②」傾向にある（Tupá, 2005, 23）。社会主義世代で現在科学アカデミーの所長をしているインタビューイ④もそのような研究者の一人であった。

「科学アカデミー部局長の仕事は 10 年前にオファーがあったが、その時は断った。私には様々な衝突に立ち向かう権力や強さがあるのか疑問だった。④」（Tupá, 2005, 50）

このような自信の欠如は、若手研究者の声の中にもみられる。

「女性は自分を過小評価する。／女性がトップレベルになれないのは別のことを優先させるから。／女性は高い水準にまで上りつめることを恐れる。⑩」（Tupá, 2007, 36）

「私はトップの科学者には決してなれないと知っている。⑫」（Tupá, 2007, 70）

「チェコ工科大学の女子学生は自信がなく、前に進むことが困難。モデルが不在というのが問題。⑬」（Tupá, 2017, 77）

自信の欠如は、保守的な女性性、すなわち自分が家族の世話を優先させなければならないという責任感、男性優位を容認する意識の上に根付いている。また、女性研究者のキャリア・モデルが不在であることも自信喪失につながっている。すなわち、女性研究者にとって長期展望が不透明である理由は、大学が求める人材像「改革心ある経営者」（Ministry, 2009, 61）と保守的な女性性の矛盾にあり、結果的に女性研究者の全体的なフェイアウトを招いていると言える。

まとめ

二世代の女性研究者の経験から明らかになったのは、世代を超えて女性に内在化された保守的認識、民主化後の女性研究者のライフコースの変容と不透明な展望、およびその背景である。

社会主義期の女性研究者にとって社会的保育は十分な施策ではなく、研究と育児の両立には困難が伴った。そのうえ、社会主義は育児に価値を付与する意識を育まなかったため、育児を担う女性研究者に対する偏見と差別的処遇が存在した。しかし、これらの困難や葛藤を育児という使命を担う女性が経験する当然の課題であるとみなし、男性の優位性を容認する傾向にあった。この保守的な認識は、現在の若手女性研究者の中にも内在化されている。彼女たちが社会主義期の女性研究者と認識を異にしている点は、育児のためにキャリアを中断すると大きな後れをとり研究に復帰できないと考えている点である。大学国際化・自由化の中で、長期間の在外研究、博士取得、ジュニア助成の獲得、そして准教授へというキャリア・ステージが形成されたからである。

また、このキャリア・ステージには、女性研究者が葛藤を抱える二つの通過地点がある。一つは、ジュニア助成への応募資格がある 35 歳までである。長期在外研究や助成金への応募時期が家族形成期にあたり、若手キャリアの確立と育児との両立という点で困難に直面する時期である。二つ目は、研究を確立してから准教授に就くまでのプロセスである。今や大学研究者には、数々の助成金を獲得し研究室を運営する経営者となることが求

められる。社会主義期の女性研究者が抱える主な葛藤は、研究と育児との両立においてであったが、現在では、マネジメントの手法を身につけ、プロジェクトを立ち上げて資金を獲得し、チームを率いるという使命との間での葛藤も生じている。育児に責任を感じる女性研究者は、それらの使命に対して消極的にならざるをえないからである。マネジメントという資質が、保守的女性性と反しており、経営者型研究者の女性モデルが不在であるということも理由の一つであろう。

以上を背景として、現在の大学では、女性研究者全体に占める社会主義世代、すなわち民主化直後の大学構造改革期に研究職になった世代＝キャリア・ステージがモデル化する以前に大学研究者になった世代が多く、また、若手研究者の場合は、准教授以降のフェイドアウトが多いという状況を招いているのである。

この打開策として、ようやくコンタクト・センターの手により、女性研究者の意識改革、女性研究者のモデルづくり、そして大学全体の意識改革等が試みられつつある。しかし、それと同時に必要なのは、女性が重きを置く育児に対する視点の転換 — 育児という仕事は、職業人、経営者に必要な人間力を育むとして、高い価値を付与するような視点の転換である。

本研究は、2016 - 2018 年科学研究費助成事業（基盤 C「チェコにおける高等教育機会とジェンダーバイアス：女性の上昇を阻害する要因」）による成果の一つである。

注釈

1. 講師の段階で女性の占める割合は60.4%であるが、助手 48%、上級助手 40.7%、准教授 25.5%、教授 15.2%と減少する(2015年のデータ、Tenglelová, 2015, 40)。
2. 『自分の部屋：10の視点』(Tupá, 2005)
3. 『クイーンズギャンビット：研究職の浸透』(Tupá, 2007)
4. 『才能ある女性の7年後』(Vohlídalová, 2014)
5. 科学候補生を取得するためには、大学あるいはチェコスロバキア科学アカデミーの科学研究生として3年間の研究が必要であった。科学研究生になるためには少なくとも2年間何らかの実践経験をもち、試験に合格しなければならなかった。その試験には、マルクス・レーニン主義科目の口述試験も含まれていた(石倉, 2001, 140-142)。すなわち、思想背景が重

視されたということである。もちろん、共産党員であること、あるいはソ連友好同盟や革命労働組合で何らかのポジションを得ていることが大前提であった。なお、民主化後も1990年代初頭まではこの学位が授与されていた。

6. 正式にはチェコ科学アカデミーという名称。科学アカデミーの始まりは、1850年のロイヤル・チェコ科学協会である。1918年にはチェコ科学芸術アカデミー、1952年にはチェコスロバキア科学アカデミーとなる。その研究所は全国各地に広がり、自然科学から人文・社会科学まで様々な分野の研究所を擁している。社会主義期は科学候補生を授与することができる唯一の高等教育機関であった。現在も博士の学位を授与する機能がある。
7. たとえば、プラハ化学技術大学では、女性研究者の割合は10%に過ぎないが、全員が社会主義世代である(石倉, 2018, 52)。市民革命直後の大学拡張期には、新設という政変当時のニッチ分野において女性が採用されやすかったとも考えられる。
8. 学生の時にハラスメントがあったという体験談はほとんどない。インタビュー③は、女子学生が多い(全学生数の6割を占める)医学部では、「医学部が女性化することをおそれ、医学部の入学試験では、女性より男性にポイントが加えられる等、男性が優先されることがあった(Tupá, 2005, 33)」と語っている。しかし、彼女自身は、指導教員から系統的かつ熱心な研究指導を受け、国外学会への同行も頻繁であり、差別的扱いはなかった(Tupá, 2005, 32)。
9. チェコの大学では著作物のみが業績になり、教育は業績とならない(石倉, 2018, 47)。
10. ソコルは、19世紀の民族復興運動期に身体能力の強化と民族意識高揚のために結成された体操教室である。様々な道具を用いて審美的な器械体操を行う。社会主義期にはソコルの活動は禁止されていたが、民主化後に活動が再開した。
11. もともとチェコには国立大学しかなかったが、民主化後の法人化に伴い、公立大学と総称するようになった。現在は、軍事大学等の数校のみが国立大学に分類される。
12. 助成金には、研究センタープログラム(経験ある研究者と博士課程学生からなるチームを対象)、チェコ科学基金、その他の省庁、国際協力組織が提供するものがある(Ministry, 2009, 42-44)。

引用文献

石倉瑞恵. 2001. チェコスロバキア高等教育におけるイデオロギー教育に関する一考察 —1950年代のマ

- ルクス・レーニン主義学科の組織・機能を中心に一、
高等教育研究. 第4集. 137-156.
- 石倉瑞恵. 2004. チェコの高等教育改革と私立大学の
誕生. IDE現代の高等教育. No.458. 55-59.
- 石倉瑞恵. 2017. チェコの女性研究者をとりまくジェン
ダー格差に関する考察 ―社会主義の功罪を中心に
一. 平成28年度石川県立大学年報. 59-67.
- 石倉瑞恵. 2018. チェコの女性研究者を巡るジェンダー
へのアプローチ ―「ジェンダーと科学のためのコ
ンタクト・センター」の活動を中心に一. 石川県立大
学研究紀要. 第1号. 45-53.
- Ministry of Education, Youth and Sports. 2009.
Higher education in the Czech Republic 2008.
Prague.
- Tenglelová, H. 2015. Postavení žen v České vědě
Monitorovací zpráva za rok. 2015. Národní
kontaktní centrum – gender a věda. Praha.
- Tupá, B. 2005. A Room of one's own: 10 Views.
Institute of Sociology of the Academy of Sciences
of the Czech Republic. Prague.
- Tupá, B. (ed.) 2007. Queen's gambit: the launch of a
research career. Institute of Sociology of the
Academy of Sciences of the Czech Republic.
Prague.
- Víznerová, H., Nyklová, B. 2016. Hledání dynamické
rovnováhy Tři generace výzkumnic na VŠCHT
Praha. VŠCHT. Praha.
- Vohlídalová, M. 2014. Rozehraná partie: talentky
sedm let poté. Sociologický ústav AV ČR. Praha.
- Vohlídalová, M., Linková, M. (ed.) 2017. Gender and
neoliberalism in Czech Academia. Institute of
Sociology of the Academy of Sciences of the Czech
Republic. Prague.

**Consideration on the life-courses of female researchers
in Czech Republic
: Focusing on the discord between the conservative gender role
and the researchers' career**

Ishikura, Mizue (Liberal Arts Education Center, Ishikawa Prefectural University)

Abstract

Socialism promoted the female labor and prevailed the nursery center, which were not enough support for female researchers. They needed to manage money for their baby-sitters and make somehow their research time. The socialism underestimated the value of the child care, so they considered female researchers who carried child care as handicapped workers. It was because they were the subjects of harassment in their job places. But they thought that it was natural for them to experience those difficulties and discords, for they regarded the female mission as child care. They also approved the male predominance.

The recognition that it's female to shoulder responsibility to child care have still existed. The female researchers after democratization differ from the female researchers in the socialism in some recognition. Now the female researchers think that the interruption of their career because of the child care made the return to the research much difficult. The researchers' career stage formed in the internationalization and the liberalization has two points through which female researchers have much difficulties to go. First, the long overseas studies and getting the grants for junior researchers are difficult for female researchers who carry child care. Second, it is hard for them to be proprietors who manage the laboratories trying to get the grants for joint researches. They can't be motivated to be proprietors, for they feel responsibility for child care, the possibility to stop their study. It is also the reason that the quality of proprietors is against the conservative female role and such female proprietor-researcher model has been absent.

Keywords: gender / women researchers / life courses / socialism / liberalization